

IPM実践指標(ブドウ)

分類	管理項目	管理ポイント	チェック欄			
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況	
予防	間伐	縮・間抜により病害虫が発生しにくい環境を作る。				
	せん定	樹冠内部の通風・採光を良好にし、病害虫が発生しにくい環境を作るとともに、薬液散布における付着の死角をなくす。				
	病害発生源の除去	せん定時に病気の発病部位や病気が感染しやすい巻きひげなどを除去する。生育期には黒とう病や枝膨病などの発病部位を除去する。				
	残さの処理	せん定くずや落葉、落果はほ場外に持ち出し、適切に処分する。				
	害虫の発生源の除去	ダニ類、コウモリガやアザミウマ類の発生源となる園内、幹周辺部及び周辺の除草する。				
	雑草適期管理	種子で増殖する雑草の発生を少なくするために、結実前に除草を実施する。				
	施肥	有機物の投入	有機質を適切に施用し、樹勢・根活性を良好に保ち、病害の発生しにくい樹体にする。			
		適切な肥培管理	窒素過多による軟弱徒長枝は病気が発生しやすいので、適切な肥培管理をする。			
		収穫時における果実の適正措置	果実は適期に収穫し、取り扱いに注意して傷みを最小限に抑える。			
		健全な苗木・穂木の使用	新植及び改植時には無病苗を植え付ける。接木時には無病穂木を使用する。			
判断	防除要否・タイミングの判断	病害虫発生予察情報等の確認				
		病害虫防除所が発表する発生予察情報や普及指導センター等が出す病害虫に関する情報を入手し、発生状況を確認する				
		気象状況の把握	気象情報を把握し、適切に防除を実施する。			
		病害虫の発生状況の把握	定期的に園内を見回り、病害虫の発生状況を観察及び確認する。			
	雑草の発生状況の把握	果樹園及びその周辺に発生している雑草の草種と発生量を観察及び確認する。				

分類	管理項目		管理ポイント	チェック欄		
				昨年度の 実施 状況	今年 度の 実施 目標	今年 度の 実施 状況
生物的 防除	ダニ類	生物農薬の 使用	捕食性天敵(カブリダニ類)を利用する。			
	灰色かび病	生物農薬の 使用	バチルス ズブチリス水和剤を使用する。			
物理的 防除	黒とう病、枝膨 病、べと病	ビニル被覆 栽培	3月下旬から7月中旬までビニル被覆を行う。			
	晩腐病	早期袋掛け	大豆粒大期までに摘粒を行い、速やかに袋掛けを行う。			
	カイガラムシ類	物理的除去	多発している場合は削り落とす。			
防除	クビアカスカシ バ	捕殺	見つけしだい、針金などを用いて捕殺する。			
	農薬の使用全般		十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。			
	適正な散布方法		散布ムラがないよう、適切な散布量で散布する。特に、SSの場合は適切な速度、間隔で走行する。			
	ハスモンヨトウ	性フェロモン 剤	性フェロモン剤を使用する。			
	クビアカスカシ バ	塗布	ジノテフランを主幹から主枝の粗皮を環状に剥いだ部分に塗布する。			
	化学的 防除 剤の選択		薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。			
			ハスモンヨトウには性フェロモン剤を使用する。			
			天敵に影響の少ない薬剤を選択する。			
			化学農薬に対する感受性の低下を抑制するため、物理的防除効果のある剤を組み入れる。			
			除草剤を使用する場合は雑草の発生状況や草種を確認し、適切な剤を選定する。			
農薬飛散防止対策		農薬散布は、無風～弱風時に飛散が少ない散布器具を使用するなど、他の作物などに飛散しないように、適切な飛散防止策を講じる。				
散布後の処理		散布器具、タンク等の洗浄を十分行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し、河川等に流入しないようにする。				
その他	土壌の流亡防止対策		のり面の保守等によって土壌流亡の防止に努める。			
	作業日誌の記帳		各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の名称、使用時期、使用量、散布方法等栽培管理状況を記録する。			
	研修会等への参加		県や農業協同組合などが開催するIPM研修会等に参加し、情報収集に努める。			